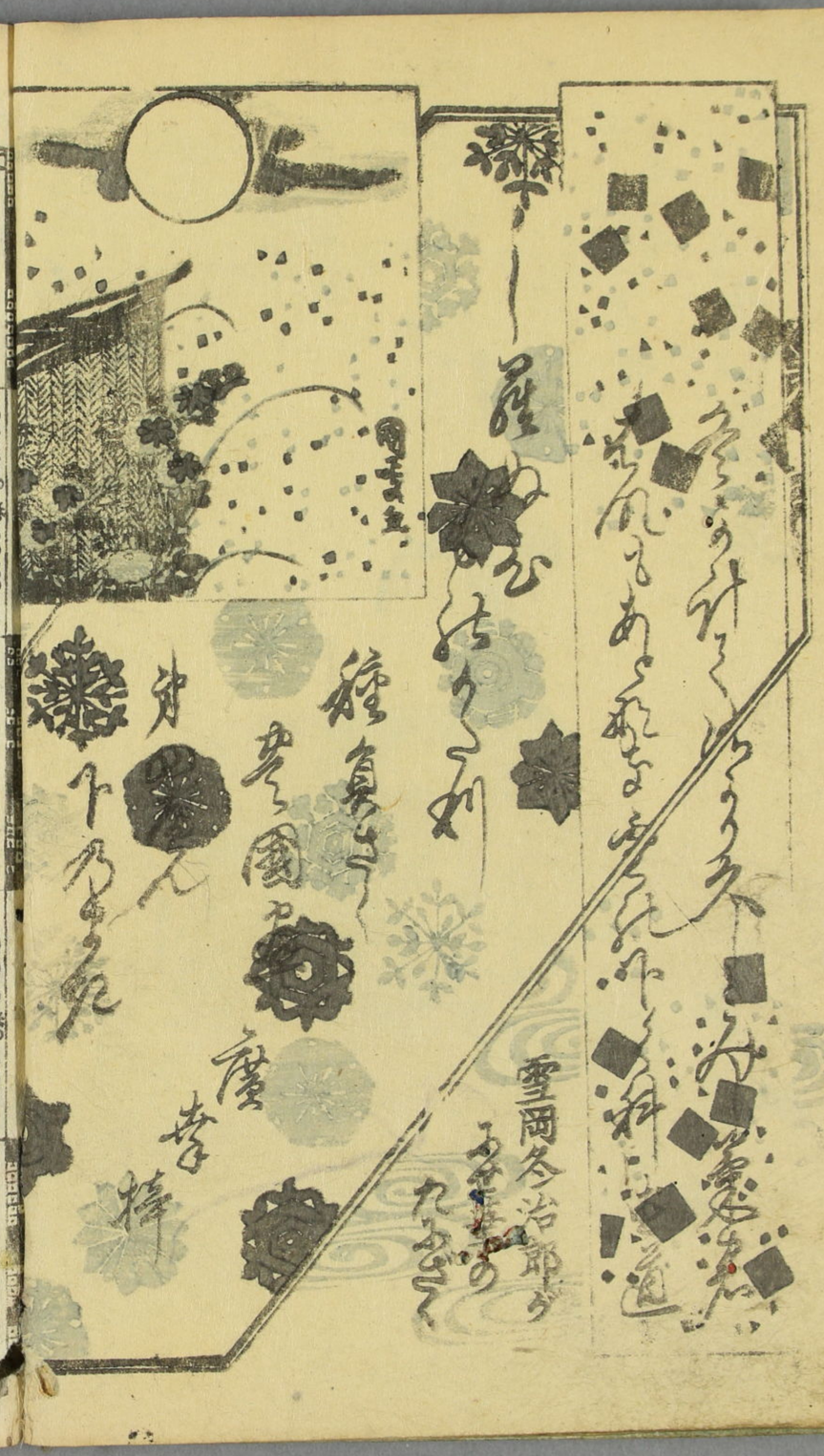
へ 13
3838
1

門 N13
3939
巻 1

三編上
三編下
国貞
国芳

奉納
願主敬白
廣岡文庫
四編上
俗物語
種員作
光國画
四編下



雪岡冬治郎

「まのあたり流れんでこまとゝ名乃つまむこ谷松たゝのあひ
がさ花月がつるゝ山ゆ」

「たさゝいなるひ松きゝみきゝ

是い世ふも知紀伊國文左ゞ英一蝶と同伴て花巷通ひの路ゝ恋雨
ふあゝ〜さまを其侭朝湖ゞ文作ーあこそおれゝあらぬ名ら鶴ひの此美く
ひも恰貞行ゞ兎角と二人連妹許いそ〜柳街土堰の合傘ゞ
み道行二人の真管公元身替の夕時雨も弥生の空ゝ花吹雪ゝ
宵いめづらしい國守の同者打扮それとゝあゝ船越ゞ情の切意ゝ
ふや来つると此序を綴ゝも彼小唄ふ梢乗込山谷船とゝ真土の
邊ふ居をトして梶園と別号せしゝなり

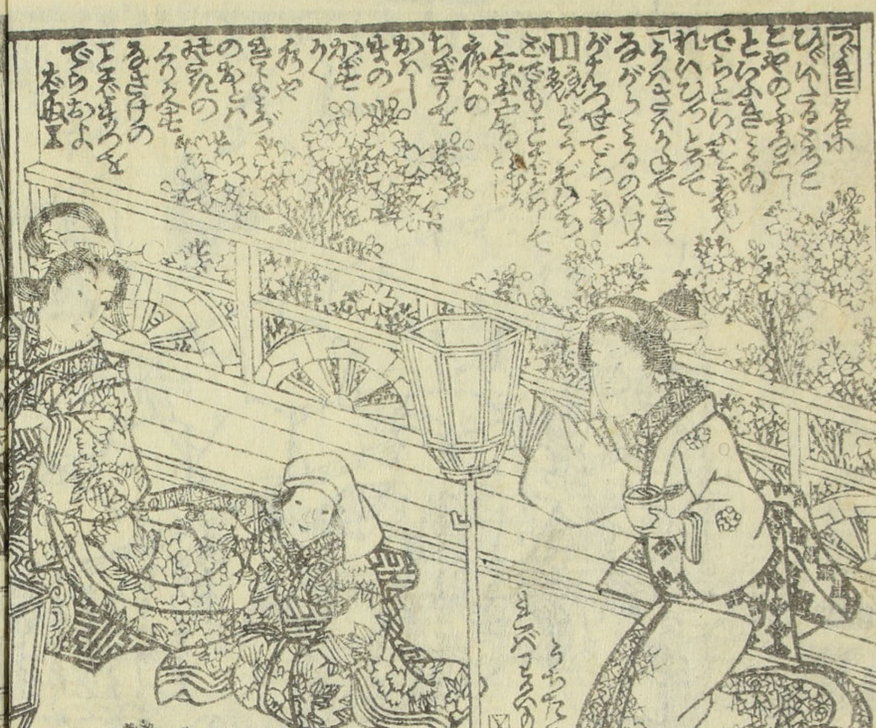
嘉永己酉初夏結稿
同　庚戌孟陬発兌

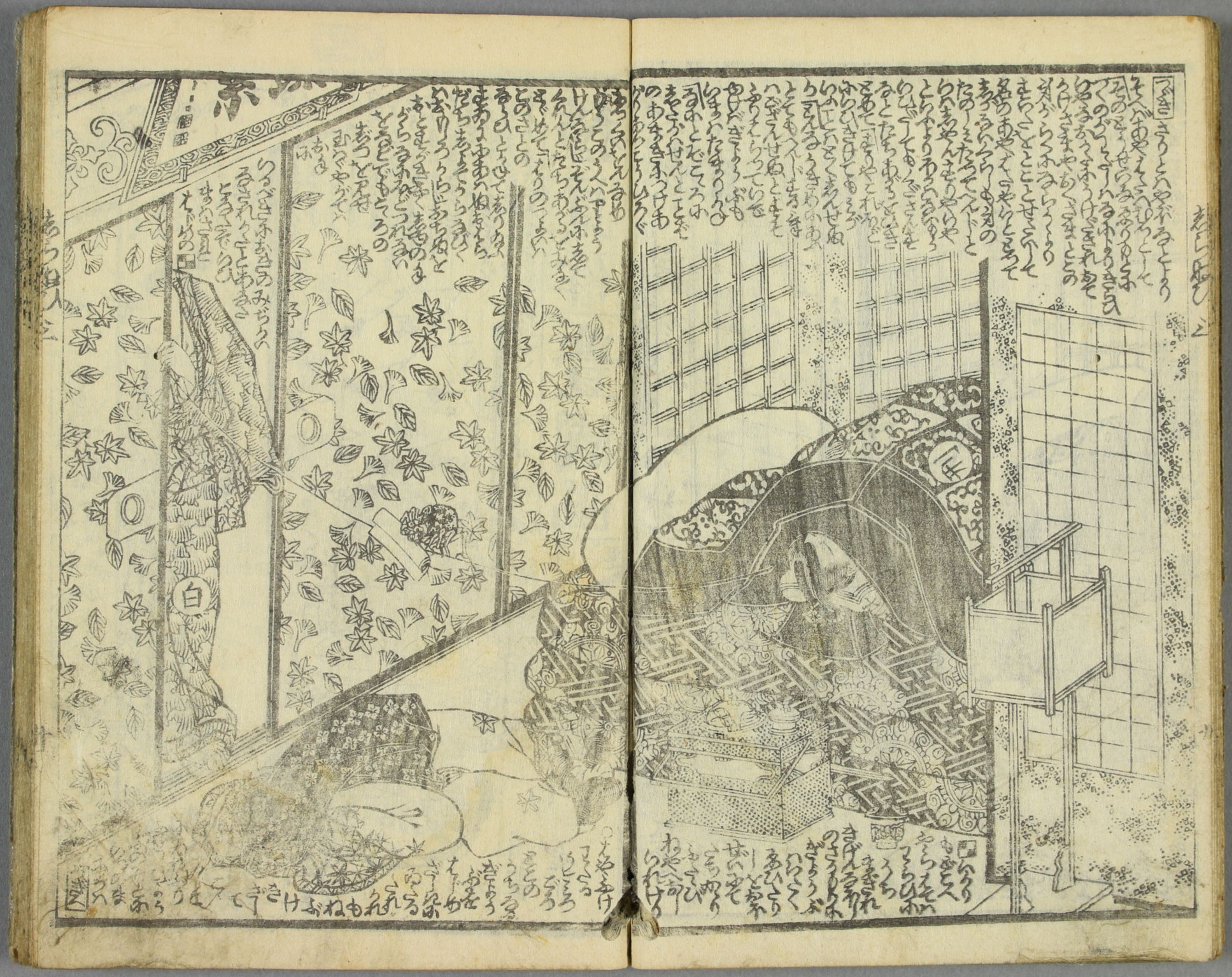
柳下亭種員記

ひとてきに
ものをかけば
とうせきの
ひかりかがやく
同苗多門之助
光行と号
子となる
光政の養
亀谷澤正
族
多門之助
舎弟
貞行
菊地

正一位
吉徳
博多柳街獨鈷屋の
遊女 綾機
実ハ大友
大盡
若菜
嬢子

二





種員作
豊國画
清書
金川

つゞき

◎こゝにて是とかのれが加ひしるを
ひらひらてのどえまくんとま
やとこゝをたそんとま
るをたをひとまもふを
沈のうゝうちらんで「このせん
まあのすきだーいらえ
づさひふたろこの
さめろてらのえ
おきとるらびらの
のち人ゆうもまら
まとひとあとり
みおろるいれふ
うもひをせさりな
をきてらのいを

あーるまとふふふんろく
かろうかとひとうるろう
なあみてさとろいちう
るんひをやうふあーでんの
ろえちまさりけり

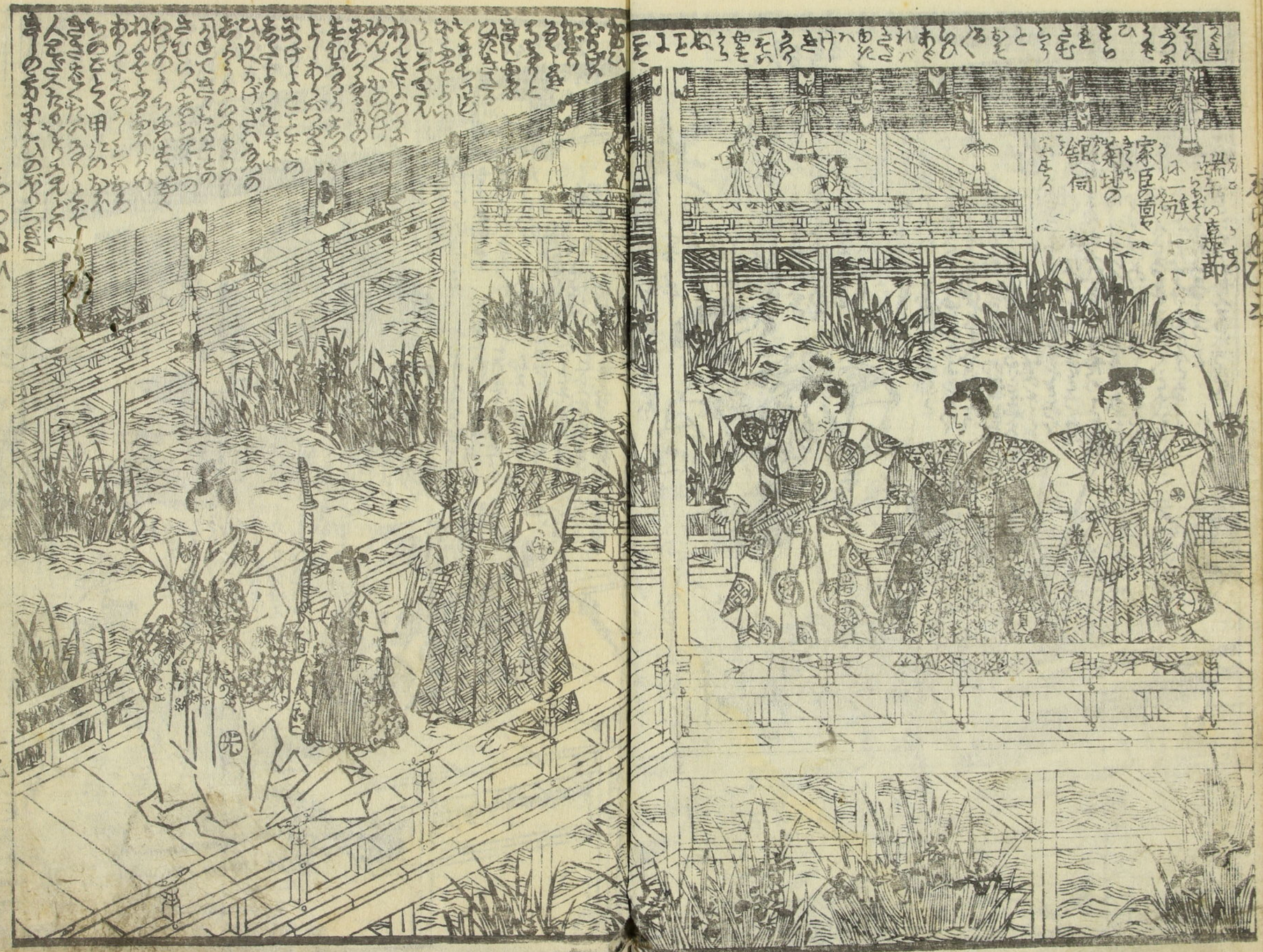
とんよりつぎのあとき

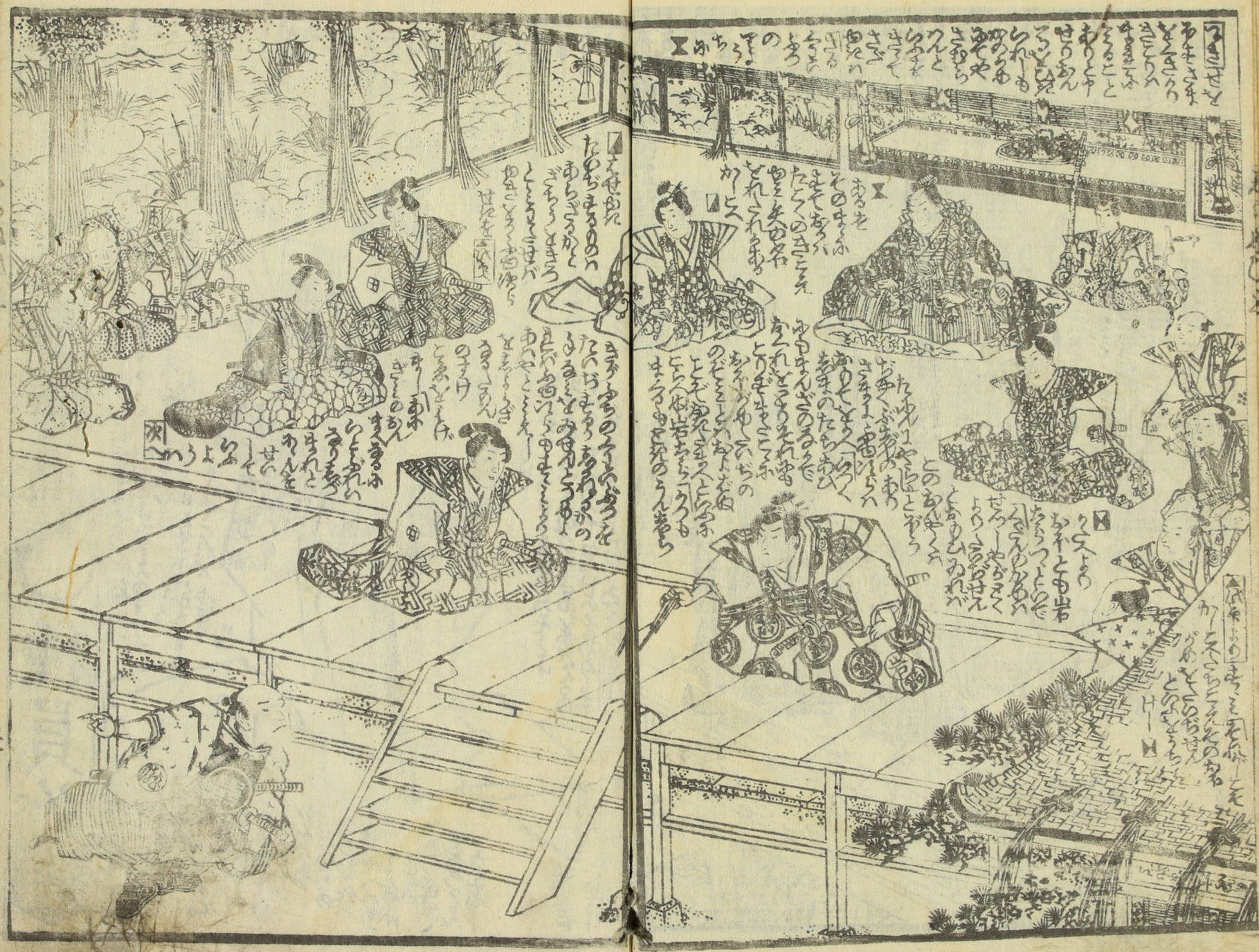
○きくちさきあきう
おさてあたりのすけ
みつあきとりのえれあきあた
ところ飛谷澤四郎政綱
ごまうのようしとりしあ
上産ごりくあだなのあろまあ
ぶあうとりひさのちとりもあふさ
あたちとうろあとうひのくあけれい

くぐそんきろう あれ

けよハ陽午
せうろれがこのあ節
ちとうきろるふこの日ハかろうのとり
るくゆくこへあ一まろるれがさざ
ゆきもひろまれのもんくふたのめん
るーとびまきのまとうとろるえの
まきりうさろルくろるれのすこのとき
のくのえまるれけるかるとりるらる
とそまられけるかるとりるらる
あろうろのひくあ
よぐるりめあくさじくゆんぐわふりそつ
まんでづるーよろ
むしまあ麻ちたちりの秋きみ
あるこぐりけのあれるとこゝろくと
ひうくとそ白水山ゆまるきのやうらと
まきこふりとのふちあんきこぐや
ろうふたちきちらひきこぐうう
またあぐれるくきうだつ
たーくらろろるのろみるところ
あんろめあ
られんとろもうれくこもんを
ろそたなすりあげくとろ
ひとはたろるあくろへ
ひきちきれあんろへ

つゞき





豊國画○種員伝

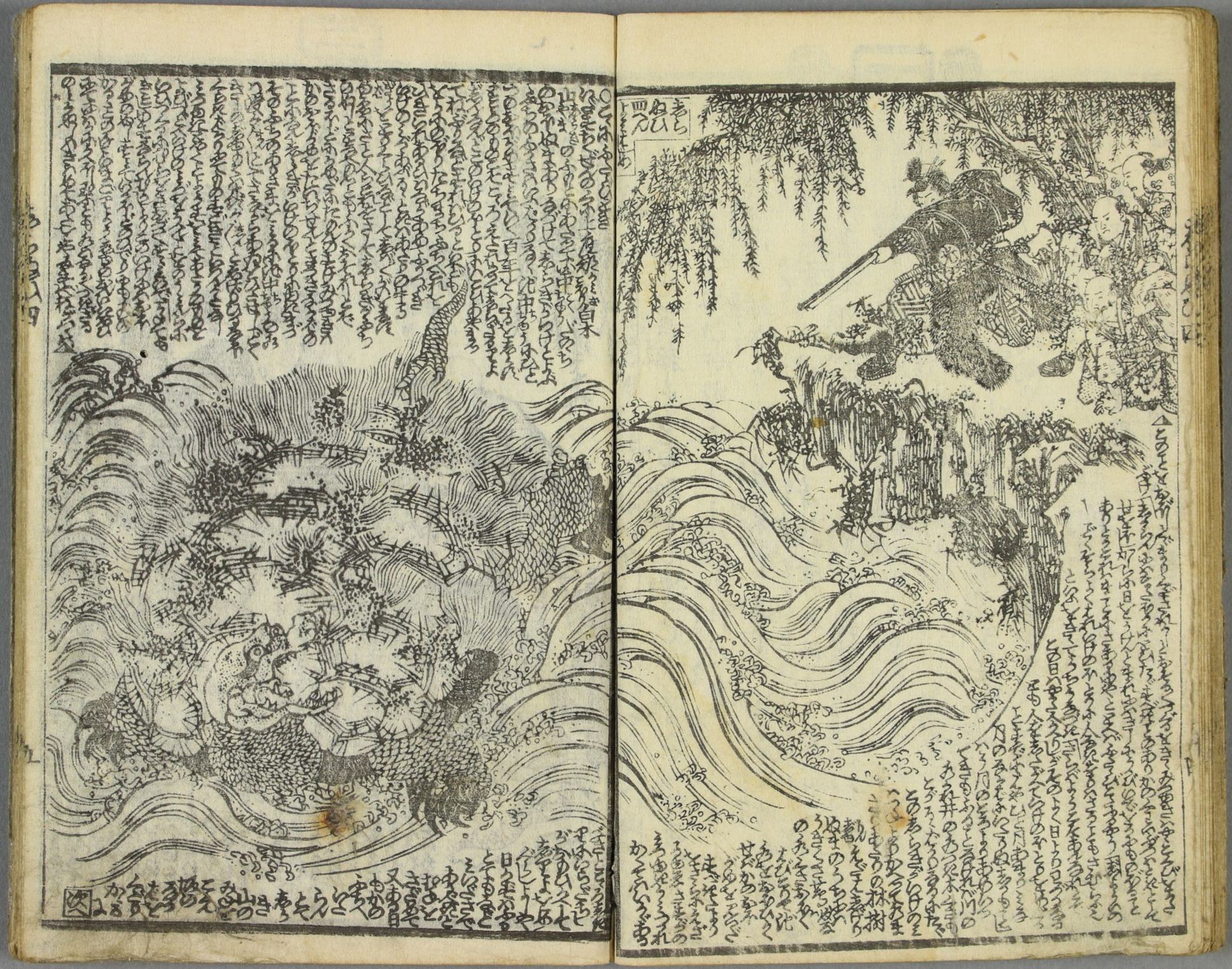
清書
金川

筑前藤賜と異称する面両金を讃せ一番ゆゞ吟ふ

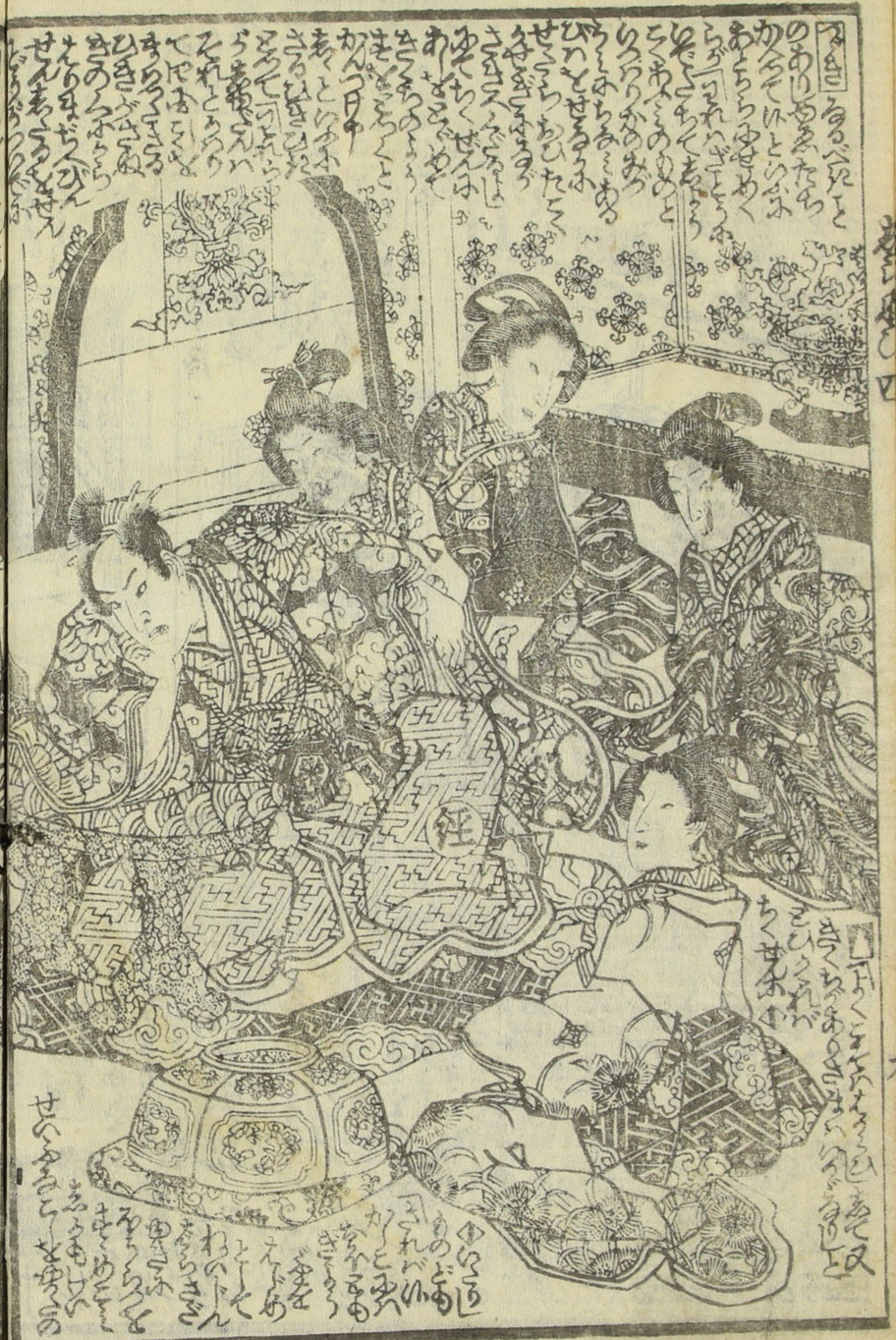
是を口画の趣向よしく若葉姫が遊里の異名白縫を続面を寫し秋作と呼名うゝ本情擬牽牛織女と擬ば恭も其角が狂ゝ作る「見仰銀河底」と此の詩よりも因つて二星逢夜の立琴も彼嘉邸の半面美人七夕の日に酒井八其苗氏とする宣井ぞ去のだる狂此も筑紫の業花を論ふる文章の叙述よりも閑富貴草句立法別号牡丹堂の世よ鳴ふ雷ゝ諸雨の吟ふる田をみ名ゞ法向川岸生乳の菴ゝ寛を拓く

嘉永辛未献歳發販

柳下亭種員記



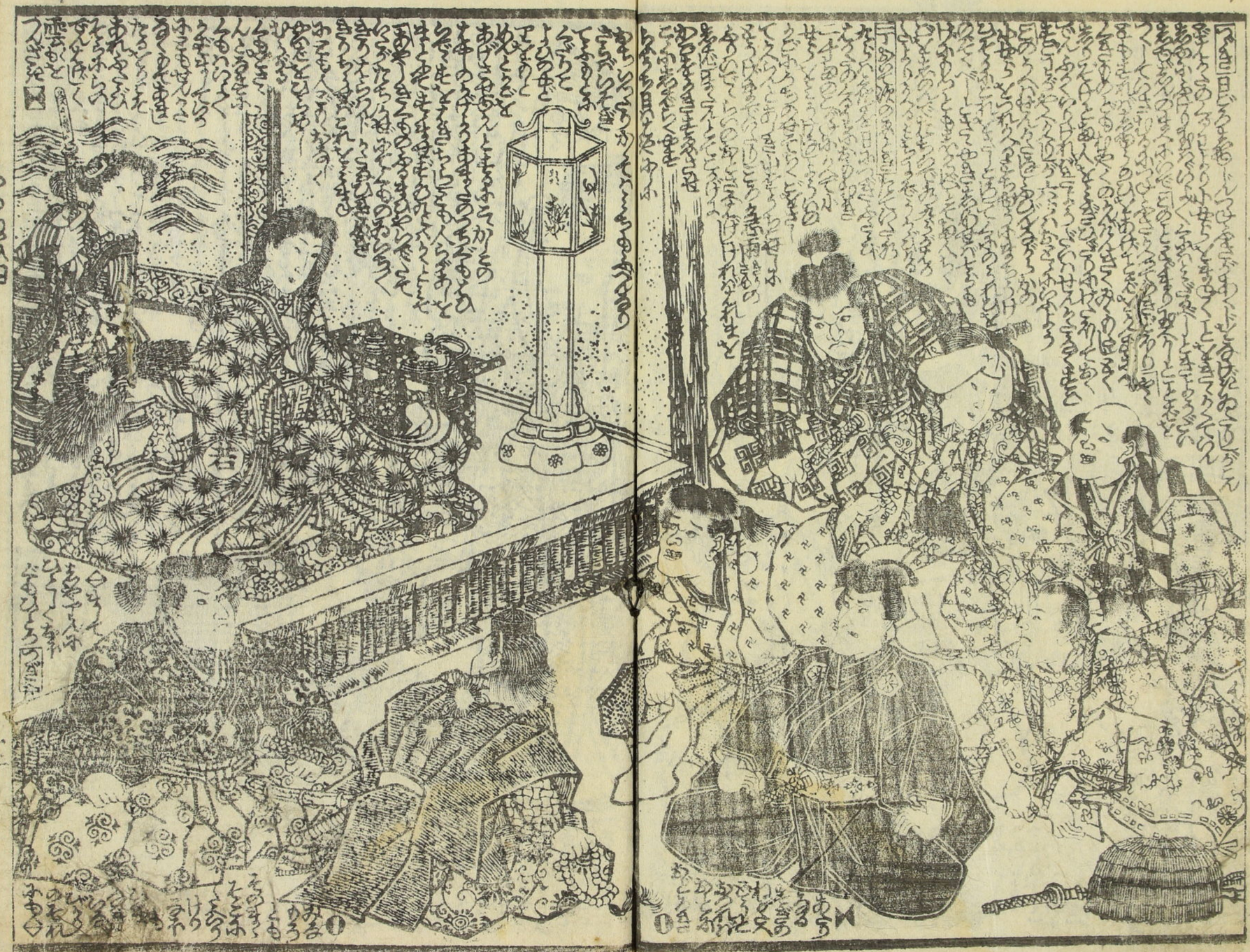
太宰小貳
經房水九郎公博士の
形容と問ひたる



種員作豊國画

立板水九郎小女良
たゞ博多の廓

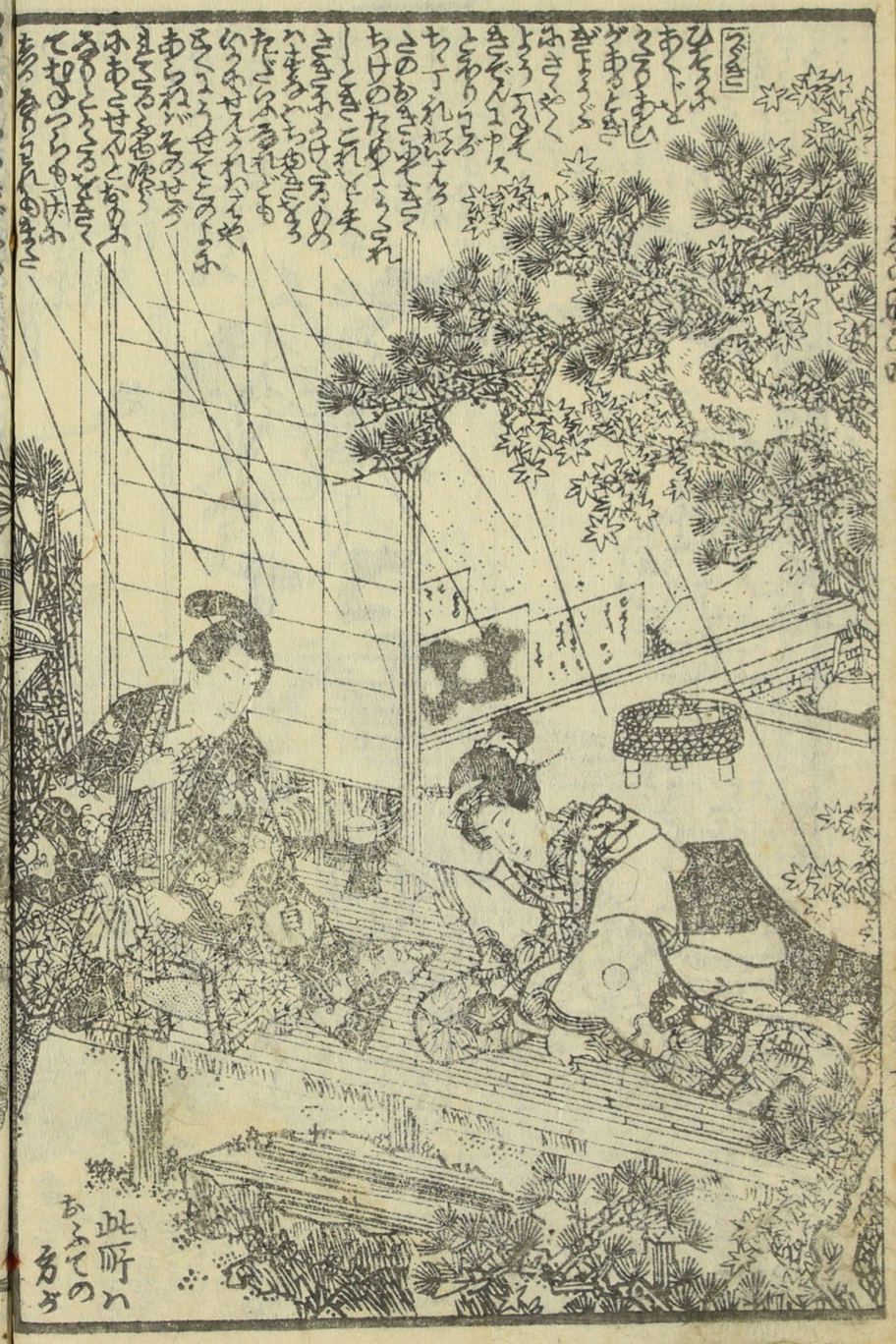
だごの屋城



六

七

七
六



つゞき

此所へあつまる方々

十年以前の事

作者 柳下亭種員

清書 谷金川

白縫前出概畧

四十一編 狐川が白状ホ刑部ヲ隠匿し頼ヲ豊の後が忠誠却て逆意の疑難を受ハ獄ホ若こハ城を追ふ特春之助時を得つこ虽貞行王従大友氏の勝下に腰を屈ス至る岩太郎英浦を偷出ー共ホ鳥山の麓に搦る愉快の話ホ申ス

四十二編 綾機が復讐ホ始り雪岡力松が怪力若狭國後瀬山に秋作照葉の再會亀谷多門之助小令師於夏ヲ風話此編の荒事より和田ヲ[illegible]

四十三編 [illegible]

河内ヲ伊達五郎が五人斬春之助悪を[illegible]

安養法師が怨魂英浦の皮肉ホ入怪談ホ[illegible]

四十四編 若菜姫黒崎城を篡ひ弟花形丸と再會是より島山の砦に繁昌威を九州ホ根ヒ中國を襲ホ沢至る

四十五編 より五十編にいたり多分長編満尾ーて菊地大友両家再興のめでたれホ巻を留ム〻く其六帙の腹稿を再暇日を得て録もべ〻ー

柳亭種彦